

国別好感度から見る「日本人」の世界認知

- JGSS 第一次予備調査を用いて -

田辺俊介

(東京都立大学大学院社会科学研究科社会学専攻博士課程3年)

Japanese Cognitive Map of Nations based on their liking:

Analyses of JGSS 1st pilot survey data

Shunsuke TANABE

This paper describes a cognitive map of nations among Japanese based on their subjective liking of various countries. It also explores the differences in perception among Japanese according to their age, educational background and occupation. By analyzing the data on attitudes towards various nations in the JGSS 1st pilot survey, it was found that Japanese tend to rate “Western” countries higher than other countries. As for the differences among Japanese, the prewar generation and those with lower educational backgrounds are more likely to indicate a lack of knowledge about other countries. Among those who gave responses, the Multidimensional Scaling (INDSCAL) results showed that the postwar generation, less educated, and blue-collar workers base their judgment in liking more on the dimension of “Japan & Western countries” vs. “other countries.” Prewar generations, more educated, and white-collar workers, on the other hand, seem to put more weight on a dimension which places Japan on one end and Russia at the other. Despite such differences, however, the overwhelming dimension underlying the Japanese cognitive map is that Western countries are rated higher than other countries.

Key words: cognitive map, subjective liking of nations, Multidimensional Scaling

本論文は、「日本人」の世界認知構造の探索的把握と「日本人」内部のその差異の検討を試みるものである。JGSSの第1回予備調査の国別好感度データを用いて分析した結果、好感度の全体的な構造として西欧諸国への好感度の方が地理的に近いアジア諸国などのそれに比べて高いことが示された。また「日本人」内部の差異としては、まず世代差や学歴差によって、そもそもある国を「認知」するか否か、という点で大きな差があった。加えて認知構造としては、戦後世代・低学歴者・ブルーカラー層の方が、それ以外に比べて「日本と欧米」対「その他の国」という図式で好感度を判断する傾向が伺え、好感度の構造に属性が一定程度の影響を与えることが示された。しかしながら、そこでも欧米を高く、他の国々を低くみるという大きな構造自体は変わらず、西欧重視、アジア軽視の傾向はある程度「日本人」の中で一貫したものであることが示された。

キーワード：認知構造、国別好感度、多次元尺度法

1 序章

1.1. はじめに

2001年9月11日にアメリカで起きた同時多発テロ事件の犠牲者に対し、多くの日本人が深い哀悼の念を抱いたことであろう。それを示すように同年10月末までに約50億円の義援金が集まったという(『朝日新聞』2001.11.3.朝刊)。しかしその一方、1982年にサブラ、シャティーラ⁽¹⁾で起こったパレスチナ難民の虐殺事件に関心を払う人は少なく、また彼女ら/彼らに対してアメリカのテロ事件に示したと同じような「哀悼の念」を抱いた人はさらに少なかったであろう。岡(2001)はここに「記憶のエコノミーにおける圧倒的な、暴力的なまでの不均衡」(前掲:109)を見て取る。つまり多くの日本人にとって「我々」意識の延長上、あるいは比較的近い位置にアメリカの人々がいるのに対し、パレスチナなどの第三世界の人々などは「遠い」、「無関係な」存在なのである。このような「記憶」あるいは「認識」のエコノミーの不均衡状態を示す事例は枚挙にいとまがない⁽²⁾。

それらの話から見て取れるのは、様々な外国に対する人々の認知が一樣ではなく、そこに不均衡が見られることである。そしてこのような認知の差が、ある外国人が「どこの国」あるいは「どの地域(ヨーロッパやアジアなど)」の出身者なのか、それによって人々の反応が異なる事態を生み出しており、それは外国人への差別や排他性の問題を考える際に非常に重要な問題にもなるであろう。

しかし、そのような日本人の世界認知のあり方に関して、それらを実証的に考察した研究はあまり多くない。そこで本研究は、JGSS第1回予備調査の国別好感度データから、上記のような日本人の世界認知の有り様の一端をデータによって裏付け、明らかにすることを目的とする。ただし「日本人」と言っても決して一枚岩的な存在ではなく、世代や階層その他の属性によって世界に対する認知の仕方が異なることも考えられる。実際「記憶におけるエコノミーの不均衡」を訴える日本人もいるのであり、またニューヨークとアフガニスタンの「どちらの被害者も助けたい」と考える人たちも少なからずいるのである(『朝日新聞』2001.11.3.朝刊)。よってそのような同じ「日本人」とされる人々の間にある世界認知の差に関して、それが個人的違いなのか、あるいは何らかの社会的属性、例えば世代や学歴などの違いであるのかについても併せて考察の対象とする。

1.2. 先行研究

日本人がどのように世界を認識し、どのような世界像を描いているかに関し、一般的には「欧米偏重」や「アジア蔑視」などの言葉で語られている。まずそのことを示すような記述的なデータとして、毎年総理府が「外交に関する世論調査」として行っている世論調査が挙げられよう(内閣府大臣官房政府広報室2002)。2002年度の結果を簡単に概略すると、まずアメリカに対する好感度が飛び抜けて高く、「親しみを感じる」が34.3%、「どちらか」というと親しみを感じる」まで加えると75.6%の人が親しみを感じている。またEU

諸国（フランス、ドイツ、イギリスなど）や大洋州諸国（オーストラリア、ニュージーランドなど）の西欧諸国の好感度が軒並み高く、6割近い人が親しみを感じると答えている。一方、隣国である韓国は「親しみを感じる」と「どちらかという親しみを感じる」を合わせても5割半ば、中国も4割半ばに止まる。さらに東南アジアとなると4割を切り、南アジアは2割にも満たず、中近東諸国に至っては12.4%と非常に低い。このような単純集計の結果からも、日本人の多くが欧米先進諸国びいきな視点を持っていることがうかがえる。しかし世論調査の結果はあくまで全体としての記述に留まっており、それらの各国・地域の好感度間の関連や、職業や学歴などと好感度の関係などの分析は行われていない。

研究者による量的調査研究⁽³⁾としては、まず泉靖一が1951年に東京の「小市民⁽⁴⁾」に対して行った調査があげられよう。世界の諸民族の中でも日本人と関係が深いと考えた16集団を選び出し、そのそれぞれに好き嫌いの順序をつけさせる方法で、日本人の「異民族」に対する社会的距離の測定を目指したものである。その結果として好感度順では、アメリカ人、フランス人、イギリス人、ドイツ人、インド人、中国人、ロシア人、朝鮮人、黒人の順であった。全体の傾向として、西洋人が高く評価され、一方朝鮮人と黒人の評価がとりわけ低いことが指摘できる⁽⁵⁾。また我妻・米山（1967）らも、人種的偏見についての研究の一貫として日本人の人種態度を調査している。それは「種々の国の人々に対して日本人が抱いている好悪感」を聞いた質問票によって行われたもので、泉（1951）とほぼ同様の結果が出ている⁽⁶⁾。つまり全体としては西欧諸国の好感度が高く、アジア諸国が低めであること、また朝鮮民族と黒人の好感度がとりわけ低いことなどがこの調査結果からも示されたのである。またそれに加え、職業などのグループによる差異も見受けられ、例えば家裁調査官（研修生）は他の農民や勤労学生などに比べてアメリカ人への好感度が低く、中国民族と朝鮮民族に対する好感度が高かった。しかしながらこのような世界認知に関しては国際情勢の変化などが与える影響は大きく、当時（1950年代や1960年代）の調査結果を現在（2003年）にそのまま当てはめることは危険である。またサンプルに関しても、東京の市民、家裁の研修生や神戸の私大の学生あるいは奈良の農民など一定の偏りがあることは否めず、知見の一般化は困難である。

ただの序列ではなく、外国の認知の基準を考察した研究としては、1973・74年に行われた「対外国意識に関する調査研究」（堀1977）が挙げられよう。日本を含む16カ国を「1等国」から「5等国」に評価したデータを分析した結果、日本人が各国を何等国かと判断する際には「先進・後進」というような発展段階を基準にすることが見いだされた⁽⁷⁾。また個々人の属性や外国に関わることへの接触度・外国に関する知識などの変数と対外国意識類型の関係が検討されている。その結果、どの国に対しても低評価の類型には20代と60代、学歴・接触度・知識度が低い者が多く、職業としては労務系や無職者が多かった。ヨーロッパ高評価型は30代と40代で、学歴・接触度が高く、職業は管理・自由業、それにセールス・サービス職の人が多かった。一方、発展途上国を高く評価する人は、60代に

は少なく、若い層（特に40代）が若干多く、職業はサービス・セールスや事務・技術系であった。最後、どの国も高く評価するのは、学歴は中程度、管理・自由業の人に多かった。このように個人の属性によって外国の認知の仕方が異なることも示されている。しかし属性差による認知基準自体の差は考察されていない。そのため、なぜある属性の人がある国を高く、あるいは低く評価するかについての考察は曖昧なままである。

さらに認知構造を詳しく検討した研究としては、小坂井（1996）が行った研究が挙げられよう。それは27民族名を任意に3つに分類してもらい、そのデータを「類似分析」という手法を用いて民族間の「類似度」・「親近度」を分析したものである。その分析の結果として、日本人は世界の民族を主に地理的分布に基づいて分類していることが示された。しかし被験者に分類の規準を直接尋ねると、地理的規準と答えるのは3分の1に過ぎず、他の理由として「人種的近似性」や「発展段階」、あるいは「好き嫌い」、「日本人との親密度」、「国民性近似」などがほぼ同頻度であがっていた。また性別によって分類の仕方が若干異なり、「男性は<先進国・中進国・後進国（発展途上国）>という構図に代表されるような経済的観点から世界を分類し、女性は身体的な特徴、あるいは好き嫌いなどの親密度などという主観的基準を採用する傾向が観察される」（前掲:105）という。また小坂井は面接で聞き取った定性的なデータを加味して考えることで、西欧を頂点として序列化された「単元的な発展段階説」によって人々は世界の諸民族を序列づけていると結論づける。しかし、それ自体は面接による質的聞き取りからの解釈であり、量的データに基づいての結論ではなく、一定の量的データで再検討する必要がある。

以上のような量的調査を用いた先行研究からも、どちらかと言えばアジア諸国よりも西欧諸国に重心を置く「日本人」の感覚の一端が示された。また年齢や職業などの個人的属性による差異が一定程度存在することが予想される。しかし、認知の基準や構造について先行研究では「発展段階」や「地理的基準」などいくつかの議論が併存しており、その検討が必要になる。また、属性差による認知構造そのものの違いも考察されていない。そこで本研究は、それらの先行研究の知見をデータ分析によって確認しつつ、さらに詳細な分析を試みる。

2 データと変数

2.1. 使用データの概要

今回の分析に用いるのは、1998年に行われたJGSS（日本版総合的社会調査）第一回予備調査のデータである。調査は首都圏と大阪府のみで行われ、サンプリングとサンプルに関しては、首都圏では「工業地域、商業地域、農業地域、住宅地域（一般）、住宅地域（団地）を層化、各地域4地点を抽出、計20地点。各地点において、20歳代から60歳代の各年代の男性1名、女性1名を抽出」し、「正規対象200名、予備対象400名」（JGSS 2001）である。一方大阪府では「大阪府下全域（岬町を除く）。層化2段抽出、計20地点。各地

点において、20歳代から60歳代の各年代の男性1名、女性1名を抽出され、「正規対象200名、予備対象400名」(JGSS 2001)が選ばれていた。このように本データのサンプルは無作為抽出法によって得られたものではなく、かつ地点に関しても首都圏と大阪府だけであり、知見の一般化には一定の制約があることも留意する必要がある。

2.2. 使用変数

今回のテーマを検討するために用いたのは、JGSSのデータの中の「国別好感度」という項目群である。「次にあげる国について、あなたの好感度はどれくらいですか。あなたの好感度を表す数字(最も低い「-5」から「+5」まで)、または、?(わからない)をつけてください。」という質問によって聞かれたものである。ただし、-5, -4, -3, -2, -1, +1, +2, +3, +4, +5の10個の選択肢のA票と、それに「0」を含む11選択肢のB票、以上2種類の調査票がある⁸。またA票では11カ国の好感度を聞いているのに対し、B票では7カ国分のデータしかない。そこで本研究では、より多い国を対象としているA票を用いることとする。

3 分析

3.1. 「日本人」の世界認知

3.1.1 各国に対する好感度比較

まずは各国への好感度を記述レベルで検討するため、-5~-1を-評価、+1~+5を+評価にまとめ、加えて「わからない」の比率の比較をしたのが以下の表1である。

表1 各国に対するマイナスの好感度とプラスの好感度の割合(%) (N=147)

(%)	日本	アメリカ	ドイツ	フランス	スウェーデン	イギリス	イタリア	中国	韓国	ロシア	ブラジル
-評価	6.1	12.2	8.8	8.2	4.1	8.8	6.8	40.1	40.8	49.7	17.7
+評価	83.7	70.1	59.9	61.9	57.8	58.5	60.5	37.4	37.4	21.8	47.6
DK	10.2	17.7	31.3	29.9	38.1	32.7	32.7	22.4	21.8	28.6	34.7

欧米諸国に対する好感度では「-」の回答が少なく、アメリカが若干多く10%強である以外、すべて10%以下である。対して中国や韓国は4割以上、ロシアに至っては5割近い-評価を受けている。ブラジルに関してはその中間で2割弱の-評価である。+評価に関しても欧米諸国が6割から7割なのに対して、中国・韓国の場合は4割に満たない。ロシアに関しては僅か2割強。ブラジルは-評価が3割弱とちょうど欧米諸国とアジアの2カ国の中間である。また「わからない」という回答の割合を見ていくと、日本を除けばアメリカが低く17.7%、中国・韓国という隣国がそれに続き2割程度。その一方、ヨーロッパ諸国は軒並み3割程度となっており、ブラジルなども3割半ばが未回答である。

次に、各国に対する好感度の平均値と標準偏差をまとめたのが以下の表2である。

表2 各国に対する好感度の平均値

	日本	アメリカ	ドイツ	フランス	スウェーデン	イギリス	イタリア	中国	韓国	ロシア	ブラジル
平均	3.24	2.16	1.96	1.82	2.33	2.05	1.99	-0.11	-0.27	-1.71	0.79
N	133	123	102	104	93	100	101	116	115	106	97
S.D.	2.08	2.22	2.11	2.01	1.87	2.09	2.02	2.70	2.88	2.70	2.70

全体傾向として欧米諸国の平均が高いのに対し、中国・韓国のアジア圏は低く、それよりさらにロシアが低い。また注目したいのは、比較的得点が低い諸国（中国・韓国・ロシア・ブラジル）の標準偏差がその他の国に比べて大きいことである。これは、それらの国に対して評価が他の国への評価に比べて大きく分かれることを意味している。

以上の集計の結果は世論調査や先行研究の結果ともほぼ合致し、好感度の序列としてはよく言われる「アジアを軽視し、欧米に顔を向ける日本」という傾向の一端がここから見て取れよう。一方、認知度を未回答率から見るならば、隣国の東アジア諸国は欧州の国々よりも高いことが伺える。しかし好感度ではやはり欧州諸国の方が高いことから、認知度が高いことが単純に高い好感度につながるわけではないことも推察できよう。

3.1.2. 「日本人」の諸国の好感度の構造

各国に対する個別の好感度の比較から、全体の傾向として欧米をより好み、アジアやその他の国を軽視する傾向が確認された。では次にその好感度の構造をさらに詳しく検討し、日本人の世界認知構造を考察するために、多次元尺度法⁽⁹⁾を用いた分析を行った。その結果、好感度の構造は2次元に集約されることがわかり⁽¹⁰⁾、図1のように示された。

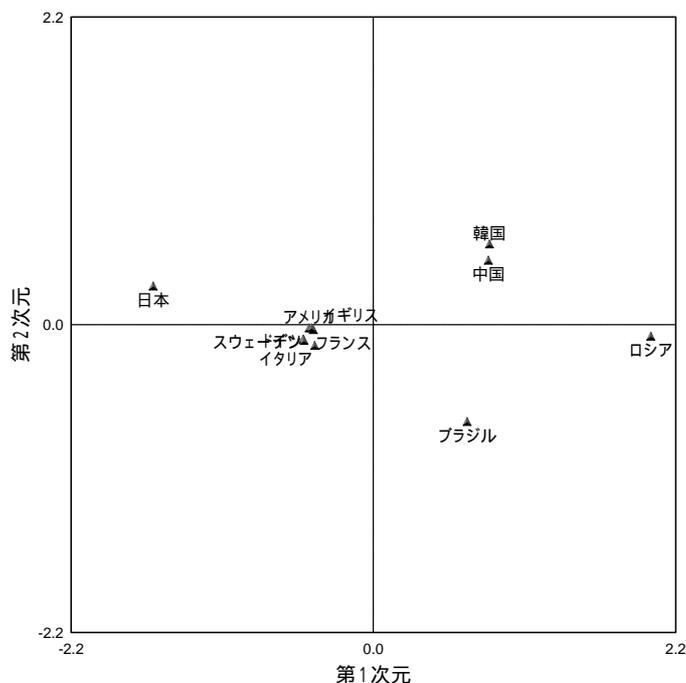


図1 好感度の構造 (N=79)

図の横軸第1次元をみていくと、まず最も左側に日本が位置し、その次にイギリス・アメリカ・ドイツ・フランス・イタリア・スウェーデンの欧米諸国が左寄りほぼ一カ所にまとまっている。次点としては図の右側にブラジル、また中国と韓国が比較的近い場所にある。その一方、ロシアは欧米資本主義諸国群と最も遠い場所に布置している。第1次元の値とそれぞれの国に対する好感度の平均値の間の相関を見たところ、0.98という非常に高い相関が見られたことから、この次元は、共通して認知された「好悪感」を示す次元と解釈するのが適当であろう。認知の基準として先行研究では「発展段階」があげられていたが(堀 1977, 小坂井 1996) この次元の序列は日本がトップで、中位にブラジル、一方ロシアが最下位であり、「発展段階」とは解釈しがたい。

単に好感度の平均値では把握できない認知構造が、縦軸の第2次元にあらわれている。第2次元を検討していくと、第1次元では対照的な場所に布置していた欧米諸国とロシアがほぼ0地点にいるのに対し、中国と韓国それに日本などアジア諸国が正の象限に、その一方南米のブラジルが負の値にある。国数の少なさから一概に言えないまでも、正の象限にアジア諸国、0地点にヨーロッパ諸国、負の象限にはそれ以外のブラジルが布置していることから、第2次元は一定の地理的布置を示すと解釈した。地理的な基準に関しては先行研究(小坂井 1996)のデータ分析の結果でも取り上げられており、妥当な解釈であろう。

以上の分析の結果から、日本人の世界の国々に対する好感度の構造として、まず西欧先進諸国をひいきにし、その他の諸国と区別する傾向が、その多くを説明していることが明らかになった。しかしながら、他にも地理的なまとまりなども好悪感を決める際の基準の一つとなっていることがデータから推察されよう。

3.2. 「日本人」内の認知構造の差異

ある国民国家の成員たちの抱くナショナル・アイデンティティが一枚岩的であると考えることが批判される(吉野 1997)ことと同様に、一国民国家内の外国イメージが一枚岩的であると考えすることは、様々な観点から批判することができよう。実際、世代や職業、学歴によってナショナル・アイデンティティに偏差があることは実証データからも示されており(田辺 2001)、世界認知・外国観に関しても、人々は自らの様々な社会的状況に応じて形成されたそれを持っていることが考えられる。そこで以下において、世界認知に大きな影響を与えると思われるいくつかの属性と国別好感度やその構造との関連を見ていく。

3.2.1. 世代差

世代の差は、様々な歴史的経験(具体的には戦争経験など)の差と関わることから世界認知にも大きな影響を与えられる。そこで回答者を53歳未満と53歳以上の2カテゴリーに分割し、それぞれの国への好感度の比較を行った。この区分は1945年以後に生まれた戦後世代とそれ以前に生まれた戦前世代を分けることを念頭に置いたものである。

表3 世代別の評価と無回答(単位はすべて%)

	日本		アメリカ		ドイツ		フランス		スウェーデン		イギリス	
	戦後	戦前	戦後	戦前	戦後	戦前	戦後	戦前	戦後	戦前	戦後	戦前
-評価	7.4	3.8	12.8	11.3	8.5	9.4	8.5	7.5	3.2	5.7	7.4	11.3
+評価	86.2	79.2	79.8	52.8	69.1	43.4	70.2	47.2	64.9	45.3	68.1	41.5
DK	6.4	17.0	7.4	35.8	22.3	47.2	21.3	45.3	31.9	49.1	24.5	47.2

	イタリア		中国		韓国		ロシア		ブラジル	
	戦後	戦前								
-評価	6.4	7.5	46.8	28.3	45.7	32.1	51.1	47.2	18.1	17.0
+評価	69.1	45.3	38.3	35.8	40.4	32.1	28.7	9.4	55.3	34.0
DK	24.5	47.2	14.9	35.8	13.8	35.8	20.2	43.4	26.6	49.1

N
戦後 = 94
戦前 = 53

まずそれぞれの国の「わからない」の率に着目すると一貫して戦前世代の方が高く、アメリカや中国・韓国は3割以上、ブラジルやヨーロッパ諸国などは5割を超える。このようにそもそもその国を好きか嫌いかの判断を下せる程度に知っているか否かというレベルにおいて世代差が見られる。しかし傾向として戦後世代は欧米諸国に対する+評価の割合が高いのに対して、隣国アジア諸国(中国・韓国)に関しては大きな差がない。その結果をさらに検討するため、次に「わからない」と答えた回答者を抜いて世代ごとの好感度の平均値を比較した。結果どの国に対する意識も世代による差は統計的に有意ではなかった。

では、そのような好悪感の構造には世代による違いがないのであろうか。そのことを検討するために、個人差多次元尺度法をもちいて分析したのが以下の結果である。

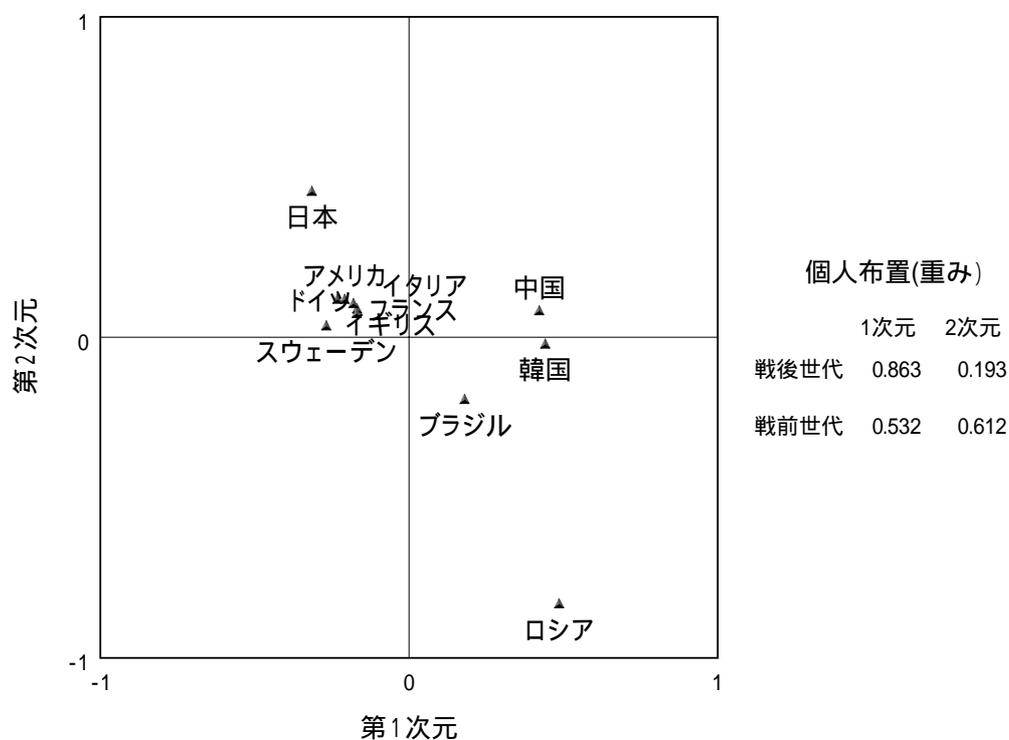


図2 好感度の構造の世代比較⁽¹¹⁾

図2に示したのは、戦前と戦後世代に共通する構造布置である。まず次元を解釈すると、第1次元では欧米と日本が近い位置にあり、一方中国や韓国それにロシアは同じく遠い。そこから「日本+欧米」対「その他諸国」という次元と解釈した。第2次元では日本を頂点とし、少し離れて欧米諸国と中国・韓国が近い位置にある。しかしロシアのみ特に遠い位置にある。日本を他の外国と区別し、特にロシアを遠い存在とみなすような次元である。

個人布置(重み)とはその値が1に近いほどその次元を重視し、逆に0に近ければその次元を判断に用いていないことを示す。次にその値を比較していくと、世代の違いとして、戦後世代が主に第1次元に基づいて好感度の判断をしているのに対し、戦前世代はどちらかといえば第2次元を重視していることが分かる。つまり戦後世代は「日本+欧米」対「その他諸国」という枠組みで判断しているのに対し、戦前世代は日本と他の外国をまず区別し、その中でもロシアを特に嫌う序列も判断に用いていることが示された。このことは戦前の「日本対外国」という対立図式と、戦後の欧米諸国への接近をした後の「日本と欧米諸国対その他外国」という認識枠組みの差を示す結果と考えられ、歴史的な社会変遷が認知構造にも大きな影響を与えることを示す傍証であろう。

3.2.2. 学歴差

学歴が世界認知へどのような影響を与えるであろうか。ここで注目したいのは、社会経済的な地位指標の一つとしてではなく、学歴差が暗に示すと考えられる様々な国に対する知識量の違いや、それと密接に関係する外国への関心の程度の差である。その知識量や関心度の差が、その国々への異なる認知を生み、結果的に異なる世界認知を持つことが考えられよう。そこでまず作成したのが以下の表4である。

表4 学歴別の評価と無回答 (単位はすべて%)

	日本				アメリカ				ドイツ				フランス				スウェーデン				イギリス			
	中	高	短	大	中	高	短	大	中	高	短	大	中	高	短	大	中	高	短	大	中	高	短	大
-評価	17	6	4		22	14	4	7	11	12		7	11	9	4	7	11	4		4	11	10	4	7
+評価	56	86	83	96	33	67	88	89	28	55	75	81	28	59	75	81	22	51	79	81	22	55	79	74
DK	28	8	13	4	44	19	8	4	61	33	25	11	61	32	21	11	67	45	21	15	67	35	17	19

	イタリア				中国				韓国				ロシア				ブラジル				N
	中	高	短	大	中	高	短	大	中	高	短	大	中	高	短	大	中	高	短	大	
-評価	11	3	8	15	28	41	33	52	33	42	38	44	39	51	42	59	17	18	21	15	中学 = 18 高校 = 78 短大高専 = 24 大学 = 27
+評価	22	60	71	78	17	35	58	41	11	35	54	48	6	17	46	26	11	45	67	63	
DK	67	37	21	7	56	24	8	7	56	23	8	7	56	32	13	15	72	37	13	22	

上の想定を示すように、学歴の差は特に無回答率に大きな影響を与えている。最終学歴が中学卒業の回答者の約半数が、ほとんどの国の好感度に対して「わからない」と答えている⁽¹⁾⁽²⁾。特にスウェーデンやイタリア、イギリスは三分の二以上、ブラジルに至っては7割以上の人が「わからない」と答えている。対して大卒以上では「わからない」と答える比率は、低い国では5%程度、もっとも高かったブラジルでも2割程度である。これは外

国に対する知識や意識に明確な学歴差が存在していることを示す結果であろう。

そこで次にそれぞれの国の好感度の平均点の比較を行った。しかし結果として各カテゴリー間の差は、全体的に低学歴者の方が若干どの国も低めに採点している傾向が見られるまでも、統計的に有意な差はなかった。

認知度には差があったが、個別の国々の評価平均点に関しては大きな差は見られなかったのである。では次に、構造的側面に対する学歴による差を検討するため、世代差と同様、個人差多次元尺度法を用いて分析した。

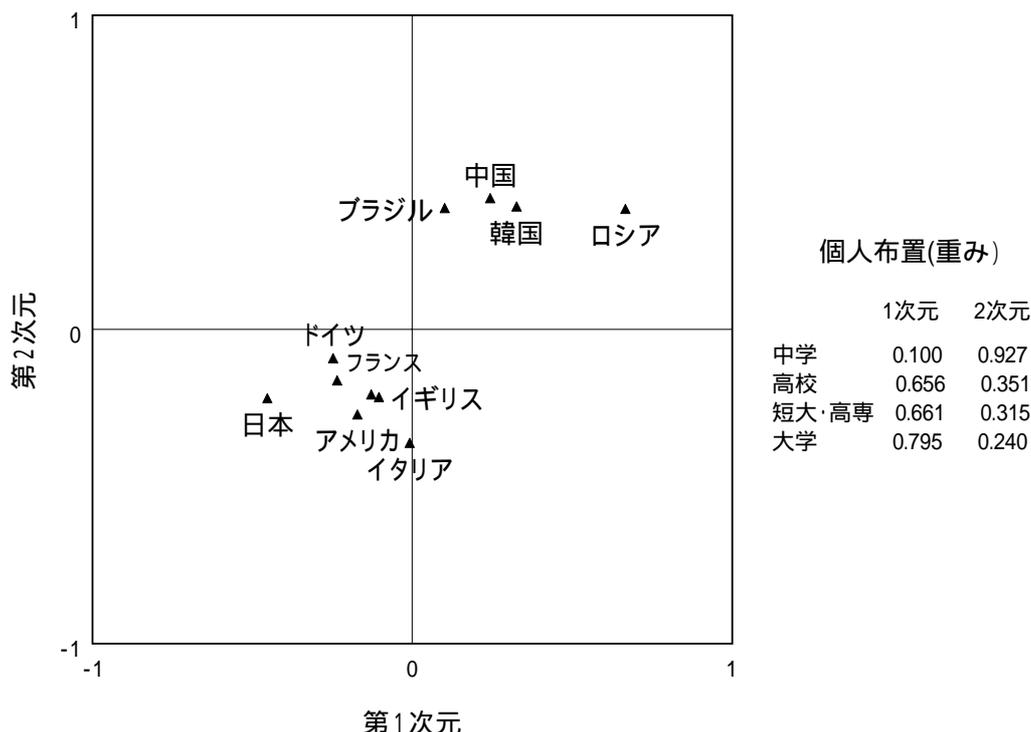


図3 好感度の構造の学歴別比較⁽¹³⁾

第1次元は、日本を頂点とし、次いで西欧諸国（その間にも一定の偏差を見つつ）を置き、それからブラジル、中国、韓国、それにロシアと序列づけている次元である。第2次元は、日本と西欧諸国が一団となっているのに対し、他の中国・韓国・ロシア・ブラジルなども近い地点にあり、「日本+欧米諸国」と「それ以外の国々」という区分をする次元と考えられる。最終重み（個人）布置を見ていくと、中卒の人が第2次元を重視する一方、それより上の学歴の人々は第1次元の方をより重視している。つまり、学歴が中卒の人々は「日本と欧米諸国」対「他の国々」という枠組みを用いるのに対し、それ以外の人々はより細かく序列化した基準も用いているのである。これは中卒の人々の方が外国に対する認知度が低いため、好感度に細かい序列をつけずにいるのに対し、より高学歴な人々の方が自らの持つ個別の知識から好感度の細かい序列付けをしたためと考えられる。

3.2.3. 職業間の差

職業生活の特性や職業的利害関心の違いは、様々な意識の差を生み出すだろう。例えば移民労働者との職の競合がありうるブルーカラー層は、外国人への排他性が比較的高いとされる（笠間 1992、田辺 2001）。そこから特定の外国との関わりにおいても、職業的な差異があることが想定されよう。そこで次に職業間の差を検討した。そのためにまず職業をホワイトカラー層（管理・専門職・事務・販売・サービス職）とブルーカラー層（農林・保安・労務・生産工程）の2カテゴリーに分け、そのカテゴリー間の差を見ていった⁽¹⁴⁾。

表5 職業別の評価と無回答（単位はすべて％）

	日本		アメリカ		ドイツ		フランス		スウェーデン		イギリス	
	W	B	W	B	W	B	W	B	W	B	W	B
-評価	8.7	6.5	14.5	16.1	11.6	9.7	7.2	12.9	4.3	6.5	7.2	16.1
+評価	85.5	87.1	73.9	64.5	62.3	64.5	66.7	58.1	62.3	54.8	68.1	48.4
DK	5.8	6.5	11.6	19.4	26.1	25.8	26.1	29.0	33.3	38.7	24.6	35.5

	イタリア		中国		韓国		ロシア		ブラジル		N
	W	B	W	B	W	B	W	B	W	B	
-評価	8.7	6.5	44.9	41.9	40.6	48.4	53.6	51.6	23.2	16.1	ホワイト = 69 ブルー = 31
+評価	63.8	58.1	39.1	32.3	43.5	22.6	26.1	16.1	53.6	51.6	
DK	27.5	35.5	15.9	25.8	15.9	29.0	20.3	32.3	23.2	32.3	

結果、まず無回答率に関しては、韓国などに対するブルーカラー層の無回答率が若干高い傾向が見られるが、統計的には有意な差ではなかった。次いで行った好感度の平均値の比較でも全ての差は統計的に有意ではなく、特に職業による違いは見られなかった。

最後、個人差多次元尺度法の結果を見ていこう（図4）。

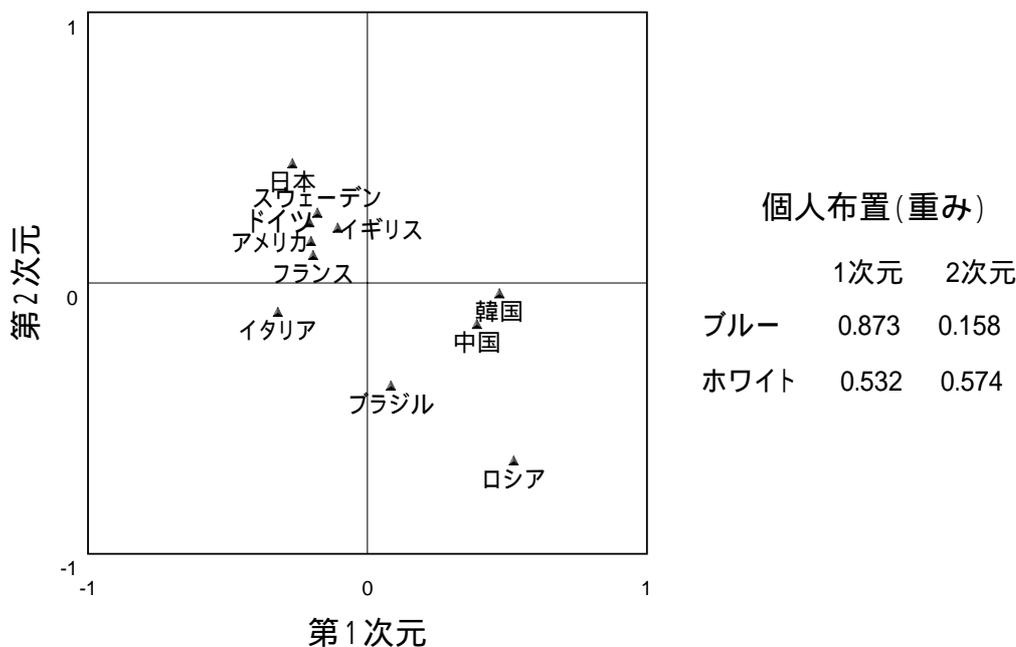


図4 好感度の構造の職業別比較⁽¹⁵⁾

第1次元に関しては、日本と欧米諸国がほぼ同位置にあり、その一方韓国・中国・ロシアが近い位置に布置している。そのことから第1次元は「日本と欧米」対「その他の諸国」という次元と考えられよう。ブルーカラー層は主にその第1次元を重視しており、「日本+欧米」と「その他の国」で好感度を分ける傾向が伺える。その一方、第2次元に関しては日本を頂点として次に欧米、アジア諸国、ブラジル、そして最後にロシアを置く序列化された次元であり、ホワイトカラー層は第1次元と同じくこの第2次元も一定程度用いて好感度の判断をしていることが示された。この結果は職業の違いが認知構造にも影響を与えることを示唆する結果であるが、そのメカニズムについて考察するには、さらに細かく職業を分類し、その質的な差を検討していく必要があるだろう。

4 まとめ

本研究では、「日本人」の世界認知の構造の探索的把握と、同時に個人属性による認知構造の差異の検討を行った。その結果、全体の好感度の構造としては、先行研究のいう「発展段階」よりは、より単純に「欧米諸国か否か」というのがまず非常に大きい分類基準となっており、そのため地理的に近いアジア諸国などに比べても欧米諸国の好感度が高いことが示された。また「日本人」内部の差異としては、世代差や学歴差によって、まずそもそもある国について好感度を答えることができるほど「認知」しているか否か、という点で大きな差があった。戦前世代、そして低学歴の回答者には、概してその認知度が低く、特にヨーロッパ諸国やブラジルなどについては判断をつけることができない人々が目立った。しかし、好感度の強弱に関しては属性による顕著な違いはあらわれなかった。西欧先進諸国に対する好感度がアジア諸国に対する好感度より高いことは先行研究の結果と一致するが、さらに好感度の認知構造を多次元で把握することで、個人属性による認知の違いを探究した。その結果、戦後世代・低学歴者・ブルーカラー層の方が、それ以外に比べて「日本と欧米」対「その他の国」という図式で好感度を判断する傾向が伺えた。しかしその一方、欧米を高く、(日本を除く)他のアジアの国々などを低くみるという大きな構造はどの世代・学歴・職業を通じてあまり変わらず、西欧重視、アジア軽視の傾向はある程度「日本人」の中で一般的、かつ一貫したものであることが確認されたといえよう⁽¹⁶⁾。

本研究では、日本人の世界認知に「西欧重視・アジア軽視」の傾向が根強いことが示された一方、それ以外に個人差があらわれる次元が存在することが明らかになった。このことは、歴史的な社会変遷、個人の体験あるいは外国への認知度や知識量などが、好感度の構造に一定程度的影響を与えることを示す結果といえよう。しかしながら本研究には未解決な部分も数多い。特にデータに関することとしては、質問文で挙げられている国がそもそも西欧諸国に偏っており、中東諸国などは一国も挙げられていないなど、質問項目それ自体が日本における世界認知の偏りを示していると言えよう。例えば輸出入の貿易額で言えば、台湾やマレーシアなどの方が多くのヨーロッパの国々よりも関係は深い。しかしそ

これらの諸国の名前が質問自体に挙がっていないのである。そのため本研究の知見をさらに深化させるため、より多い国々に対する評価を聞いた調査を行い、認知構造のさらなる探求を行う必要がある。加えて、そのような認知構造と個々人の外国経験などの関連を考察することも興味深い知見をもたらすと思われる。

[Acknowledgement]

日本版 General Social Surveys (JGSS) は、大阪商業大学比較地域研究所が、文部科学省から学術フロンティア推進拠点としての指定を受けて (1999-2003 年度) 東京大学社会科学研究所と共同で実施している研究プロジェクトである (研究代表: 谷岡一郎・仁田道夫、代表幹事: 佐藤博樹・岩井紀子、事務局長: 大澤美苗)。データの入手先は、東京大学社会科学研究所附属日本社会研究情報センターSSJ データ・アーカイブである。

[注]

- (1) 1982 年、当時内戦状態にあったレバノンにイスラエルが侵攻した際に、ベイルートでおきたパレスチナ難民虐殺事件。当時の国防大臣をつとめていたのは現イスラエル首相シャロンであり、彼はキリスト教右派の民兵をサブラとシャティーラの難民キャンプ内に入れて、その虐殺を許可したと言われる。その結果、数千人のパレスチナ難民が惨殺されたという。
- (2) このような認識の不均衡の要因としてはマス・コミなどによって流される情報量の違いの結果とも考えられる。しかし、逆に言えばそのようなマス・コミの報道量の差がいかんにして生まれたのであろうか。それは多くの日本人の世界認知の結果とも考えられよう。そのような要因論に関しても大変興味深いのが、本研究においては論証可能な範囲を越えており、取り扱わない。
- (3) アメリカにおいては、主に社会心理学の分野において計量的な一連の研究が存在する。例えば Robinson & Hefner (1967) は 16 カ国の評価してもらったデータを分析し、「共産主義」「経済的発展性」「スペインの影響」「アジア対欧米」の 4 因子を抽出した。また Wish (1971, 1972=1976) は、21 カ国の類似性評定データを分析し、その結果認知次元として「政治的立場」「経済的発展性」「地理と人口」「文化と人種」を析出した。加えてその認知構造には男女差、(政治的)ハト派とタカ派の差、出身国の差があることを発見している。
- (4) 「とくに日本全国出身の人びとから形成され、最もマス・コミュニケーションの発達した階級」(泉 1953:426) ということサンプルとして選ばれた。ただし、あくまで「街頭インタビュー」的なサンプリングであり、その代表性が疑わしいことは否定できない。
- (5) これらの結果は、あくまで「~人」と聞いているため、本研究の対象とする外「国」に対するイメージや認知とのズレも考えられ、知見を参考にするには一定の留保が必要となる。
- (6) この調査では、イギリス人、インド人などの国名、あるいは朝鮮民族、中国民族のような「民族名」、あるいは黒人という「人種名」で聞いている点などで一貫性がなく、解釈の際にはその点に注意が必要である。
- (7) 「先進工業国」と「発展途上国」という発展段階が分類の基準となるという知見は、日本人中学生による日本を含む 12 カ国のイメージ評定の分析結果でも示されている (今井 1987)。
- (8) 「A 票または B 票をランダムに割り振った」(JGSS 2001) ものである。
- (9) 「わからない」という回答を除き、-5 ~ +5 までの数値に置き換えたデータからユークリッド距離に基づいて距離行列を作成し、それを元に分析を行った。
- (10) ストレス値に関しては、第 1 次元で 0.193、第 2 次元では 0.013 まで減少したため、第 2 次元までを取り上げた。
- (11) V A F 比(平均)は、第 1 次元で 0.870、第 2 次元では 0.939 まで上昇した後、第 3 次元でも 0.960 とほぼ改善が見られないため、第 2 次元までを取り上げた。
- (12) 中卒の回答者には高年齢層が多いと考えられ、そのような年齢による効果も含まれている可能性もある。しかし多変量をコントロールするにはサンプル数が少ないため、その独立

の効果を検討するのは今後の課題としたい。

- (1³) V A F 比(平均)は、第 1 次元で 0.815、第 2 次元では 0.884 まで上昇する。第 3 次元の場合 0.933 となるが、あまり改善が見られないため、第 2 次元までを用いることとした。
- (1⁴) 本来、個別職業の質的な差を検討するのであればさらに細かいカテゴリー分けが必要となるが、サンプル数の問題もあり、本研究では質的な差が最も大きく出ると考えられるブルーカラーとホワイトカラーという区分を採用した。
- (1⁵) V A F 比(平均)は、第 1 次元で 0.863、第 2 次元では 0.919、第 3 次元でも 0.949 であった。第 2 次元において 0.9 を超えること、3 次元以上は解釈が困難になることなども考慮し、ここでは第 2 次元までを用いて分析を行う。
- (1⁶) ただし本論文で用いた JGSS 第 1 回予備調査のデータは、首都圏と大阪府のデータであり、厳密には知見を「日本」全体に適用することはできない。しかしながら、世論調査などの結果と近い傾向を示すことから、また首都圏と大阪府に共通する「大都市圏」としての傾向が決定的な影響を与えるとは考えにくいことから、ここでは「日本人」との言葉を使っている。

[文献]

- 堀洋道, 1977, 「日本人の外国評価とその特徴」 穂山貞登編 『特集日本人の対外国態度』:81-129 至誠堂 .
- 今井芳昭, 1987, 「第 6 章日本における映画視聴の効果と外国 11 カ国に対するイメージ」 辻村・古畑・飽戸編 『世界は日本をどう見ているか - 対日イメージの研究』, 日本評論社 .
- 泉靖一, 1953, 「東京小市民の異民族に対する態度」 日本文科学会編 『社会的緊張の研究』 有斐閣 .
- JGSS, 2001, 「第 1 回予備調査調査の方法」 (= http://jgss.daishodai.ac.jp/pilot1/sampl_p1.html)
- 笠間千浪, 1992, 「ナショナリズムとレイシズムの交錯 - ネーション = ステイト イギリスの歴史と現実」 梶田孝道編, 『国際社会学 - 国家を超える現象をどうとらえるか』 名古屋大学出版会, 241-266.
- 小坂井敏晶, 1996, 『異文化受容のパラドックス』, 朝日新聞社 .
- 内閣府大臣官房政府広報室, 2003, 「世論調査報告概要平成 14 年 10 月調査外交に関する世論調査」 (= <http://www8.cao.go.jp/survey/h14/h14-gaikou/index.html>) .
- 岡真理, 2001, 「私たちは何者の視点によって世界を見るか」 『現代思想 10 月臨時増刊号総特集 これは戦争か』 青土社, 105-110 .
- Robinson and Hefner. 1967. "Multidimensional differences in public and academic perceptions of nations". *Journal of Personality and Social Psychology* 9: 251-259.
- 田辺俊介, 2001, 「ナショナル・アイデンティティの実証的研究 - 1995 ISSP: National Identity データを用いて」, 東京都立大学大学院社会科学部 2000 年度提出 .
- 我妻洋著・米山俊直, 1982, 『偏見の構造 - 日本人の人種観』 日本放送出版協会 .
- 吉野耕作, 1997, 『文化ナショナリズムの社会学』 名古屋大学出版会 .
- Wish M., 1971, "Individual differences in perceptions and preferences among nations", C. W. King & D. J. Tigert(eds.), *Attitude research reaches new heights*, Chicago: American Marketing Association
- Wish, M., M. Deutsch, and L. Biener. 1972. "Differences in perceived similarity of nations". Shepard,

R. N., A. K. Romney and S. Nerlove(eds). *Multidimensional Scaling: Theory and Applications in the Behavioral Sciences 2*. New York: Seminar Press:289-313.=1976 . =岡太彬訓・渡辺恵子訳
「国家間に知覚される類似性の差異」『多次元尺度構成法 応用編』:317-341.